

第4節

イベントを通じた水辺公共空間の価値の再発見と利活用の検討

「実証実験：水辺で遊ぼう♪くらふとカーニバル」の実施に至る経緯と調査結果の報告

公益財団法人日本都市センター研究員 高野 裕作

はじめに

「住民がつくるおしゃれなまち研究会(以下、本研究会)」では、戸田公園・漕艇場周辺の価値を発見し、利活用のあり方を検討することを目的として、2018年7月15日に漕艇場に隣接する高台公園にてイベントを実施し、来場者およびイベント主催者・出店者らにアンケート調査・ヒアリング調査を行った。本稿ではそのイベントの実施に至る研究会での議論の経緯と、調査結果を報告し、今後の住民主体のまちづくりにおけるこの空間の利活用のあり方について考察するものである。

1 研究会での議論の経緯

(1) 戸田市内におけるイベントの開催状況

本研究会を発足するにあたり、戸田市における「おしゃれ」な場所や住民が参加する活動の現状を把握するため、2017年5月～7月にかけて、戸田市職員と卯月座長を交えて3回のワークショップを実施した。

この3回のワークショップを通じ、戸田市において景観まちづくりに活用しうる「おしゃれ」や「シビックプライド」が感じられる資源として、「彩湖・道満グリーンパーク」と「戸田公園・漕艇場」の二つの都市公園の存在が挙げられた。また戸田市で開催される大小・新旧様々なイベントについても議論され、荒川河川敷で開催される「戸田橋花火大会」や彩湖・道満グリーンパークで開催される「戸田マラソン」など、市外から多くの来客があるイベントが最大

のイベントとして挙げられた一方、住民主体の活動として「朝市」や「アート結び市」といったイベントが挙げられた。

表5-2 戸田市内で開催される主なイベント(ボート関連除く)

イベント名	主催	場所
戸田橋花火大会	戸田橋花火大会実行委員会	荒川河川敷
戸田マラソン in 彩湖	戸田マラソン大会実行委員会	彩湖・道満グリーンパーク
市内商店会イルミネーション点灯	市内商店会	市内商店会
戸田ふるさと祭り	戸田ふるさと祭り実行委員会	ボートレース戸田
朝市※3・6・9・12月の年4回	戸田市朝市実行委員会	市役所、市役所周辺
こどもの国地域イルミネーション点灯	戸田中央総合病院、社会福祉法人さきたま会ほか	こどもの国、こどもの国周辺
キャンドルナイト in とだ	13万人のキャンドルナイト in とだ実行委員会	後谷公園
商工祭	戸田市商工会	市役所、市役所通り、文化会館
アートむすび市 in 戸田	戸田マルシェ	あいパル
市民体育祭	戸田市市民体育祭地区大会実行委員会	市内小・中学校
道満さんま祭り	戸田市水と緑の公社	彩湖・道満グリーンパーク
上戸田ゆめまつり	上戸田商店会	市役所、市役所通り
あいパルフェスタ		あいパル
後谷公園まちかど広場コンサート	市役所南通りの景観と文化を育む会	後谷公園
戸田市美術展覧会	戸田市美術展覧会実行委員会	文化会館

これらのイベントの開催場所は、彩湖など大規模な敷地を持った公園の他、市役所やあいパル(上戸田地域交流センター)周辺の公共施設が多い一方、戸田公園、漕艇場はボート競技が中心であり、市民があまり利用していないことが明らかとなった。

(2) 戸田市民のライフスタイル調査(アンケート)

市民の戸田市に対する意識・愛着と日常的な行動・ライフスタイルを把握することを目的として2018年1月に市民アンケート(20～40代の市民3,000名に配布、1,084票の有効回答)を実施した(第5章第5節)。この調査の中で、市民が対外的に戸田市の誇りと感じていると考えられる「友人を案内したい場所」では第1位に彩湖・道満グリーンパーク、第2位に漕艇場とそれぞれ多く挙げられたのに対し、休日に外出するお気に入りの場所としては上位1位・2位はショッピングセンター、スーパーが挙げられ、彩湖・道満グリーンパークは3位に留まるほか、漕艇場は上位10位にも挙げられなかった。漕艇場および競技は広く市民に認知され、市民の誇りの形成に寄与しているが「行ったことがない、日常的に行かない」場所であることが明らかになった。

表5-3 市民アンケート「友人を案内したい場所」上位5位

上位5か所	全体 (n=980)		主な理由
	回答数	割合	
彩湖・道満グリーンパーク	194	19.8%	自然が豊か、BBQができる、広い
戸田公園（漕艇場）	191	19.5%	景色がきれい、戸田にしかない、有名
荒川河川敷	69	7.0%	花火大会が見える、散歩にいい、四季折々で楽しめる
児童センターこどもの国	57	5.8%	駅から近い、子どもが遊べる、施設が充実している
花火大会	49	5.0%	戸田を代表するイベント、有名、満足してもらえる

表5-4 「休日にお出かけする市内のお気に入りの場所」上位5位

上位5か所	全体 (n=1,780)	
	回答数	割合
イオン北戸田	450	25.3%
スーパー	203	11.4%
彩湖・道満グリーンパーク	124	7.0%
T-FRONT	98	5.5%
飲食店	84	4.7%

彩湖・道満グリーンパークのさらなる活用の可能性や、後述する「マルシェ」による朝市などのイベントなど、現状として魅力の向上に寄与している要素をより強化していく可能性もあるが、「水辺」ならではの空間の魅力を住民に体験すること、またボート競技に関心を持ち、さらにはボート競技関係者と市民との交流を図ることは、戸田市に特有の資源を活用したまちづくりに資すると考えられ、2018年2月に開催された第4回研究会にて高台公園にてイベントを実施できないか提案がなされた。その提案を受けた戸田市政策秘書室が、公園管理者に利用申請をしたところ、2018年7月15日の開催が可能となったものである。

2 イベント実施に至る経緯・検討過程

(1) 高台公園の概要・企画の主旨

今回イベントを実施する戸田公園高台広場(以下、高台公園)は、ボート競技大会が開催される際の観客席に接しており、漕艇場のコース水面を見渡することができる。園地内は高木、低木がまばらに植えられ、少数の健康遊具とベンチが設置されているほか、1964年

の東京オリンピックで使用された聖火台が置かれている。日常的には近隣の旭ヶ丘町会を中心とした住民の憩いの場となっているほか、ボート競技大会が開催されるときには観戦や選手・関係者の休憩場所として利用されている。

高台公園の底地の所有者は市であるものの、管理が県の公園課であること、戸田公園全体の本来的な利用目的がボート競技であることなどから、これまで公園空間のイベント活用などは行われてこなかった。

ボート競技は市民にとって認知されているにもかかわらず、上述の市民アンケートのとおり高台公園の立地は漕艇場を隔てて市街地から離れており、他に周囲には目的地となるような施設なども存在しないため、日常的に訪れることがない場所となっている。しかしながらコース水面の開放的な景観など、場所の魅力を高めるポテンシャルは高く、多くの市民の方々に訪れてもらうきっかけを作ること、ボート競技を観戦してもらい、ボート関係者と市民との交流を深めることを目的として、イベントを企画することとなった。この目的を達成するために、「住民主体のイベント(マルシェ)」、「ボート競技の観戦」、「ボート競技関係者との交流」を主なイベントのコンテンツとすることを大方針として、研究会事務局(戸田市・日本都市センター)は関係各所との調整を行った。

(2) 戸田マルシェ

イベントの実施に当たり、その主たるコンテンツの企画は従前から戸田市内で朝市などのイベントを実施・運営してきた団体である「戸田マルシェ」に依頼した。これは市民による自主的な活動であり、手作り工芸品の物販やワークショップ、クラフトビールなどを中心とした飲食が主な出展物であり、特に「アート結び市」というイベントでは各種音楽・ダンスといったステージでの催しも要素として

加わる。これまでのイベントを通じて出店者、参加者の間で一定の関係性が築かれつつあった。

これまで開催されてきた朝市などのイベントは、市街地内の広場・公共施設(市役所前・あいパルなど)を会場として一定の集客・盛り上がり収めていたが、企画者の戸田マルシェの中心メンバーである今村仁美氏は、以前から漕艇場の景観の魅力を感じ、高台公園を利用したイベントを行いたいという意向を持っていた。高台公園のイベント利用の申請は、これまで民間の団体に対して許可されておらず、今回は研究会における調査の一環として戸田市が申請者となったことから、実現に至ったものである。

「戸田マルシェ」は、出店者の募集・選定および出店者間の調整、店舗の配置の検討、ステージの設営および運営、記録等に必要な人員の手配、SNSを通じたイベントの告知などを行っている。

(3) ボート競技者

戸田漕艇場には、大学や実業団の漕艇部・チームの艇庫が設置されており、選手・部員は基本的にそこで合宿生活を行いながら学校・会社に通学・通勤するという生活スタイルを持つ、特異な地域である。彼らの生活は競技中心であり、戸田市に住民票を置いているものの行政・地域住民との交流などは乏しく、いわば独立した「ボート村」の様相を呈している。

2020年の東京オリンピック・パラリンピックにおいて戸田漕艇場は競技会場ではないが、オリ・パラに関連付けた競技の普及と、今後競技を続けていくことの意義・モチベーションを向上させることを模索する有志のボート競技者・指導者がおり、その中心人物として、中央大学OBで現在は中央大学ボート部戦略マネージャーを務める村井晋平氏が2017年末ころから企画を検討し始めた。

時系列的には、「研究会」にて公園を活用するイベントを行うこ

とが提案され、戸田市が公園管理事務所と交渉を行ってイベントの日程が確定する前より、村井氏の発案によって中央大学漕艇部名義にて7月15日は「タイムトライアル」としてコース水面の占用利用が申請されていた。この「タイムトライアル」は単に練習の一環としての記録会ではなく、また全日本選手権や大学選手権などボート協会が主催する大会とも異なり、従来とは異なる人々(主に地域住民)に競技を見てもらう、知ってもらうことを狙いとして行うもので、「研究会」とは全く無関係に企画が進められていたものであった。

通常のボート競技は2,000m(一部は1,000m)の距離で争われ、競技時間に対して観客が漕手を観ることができる時間が限られるなど、一般の観客がボートの魅力を感じる事が難しい構造となっている。村井氏らはこうした構造を克服して競技の魅力を伝える工夫として、レースの距離を500mに短縮し観客席からテンポよく観戦して魅力を感じられる構成としたほか、実況アナウンスやBGMを流すなど、盛り上がりを感じられるようにしたり、後述のように艇庫巡りやボート試乗体験など来場者と競技者の交流を行うことを検討していた。また運営については、既存の競技団体に依存しない従来とは異なる大会運営のあり方を模索して、冠スポンサーを募ってコース使用に係る費用を賄う方法を取り、各大学漕艇部のマネージャーやOB/OGを中心に企画を進めていた。

このように研究会・マルシェと村井氏らの「タイムトライアル」は当初は全く別個の動きとして企画・検討が進められていたが、別の側面から見れば、研究会・マルシェがイベントを行うための公園利用申請は、全日本選手権など大規模な大会が行われる日程では不可能であったが、全く新しい企画によってコース水面の利用が申請されていた日程であったために申請が許可され、同日に行われることになったものである。

研究会側としてはコース水面で模擬レースを行ったり、ボート部

員との交流をしたいと考えており、ボート関係者との協力を構築していた。一方、ボート関係者側としても多くの人に観戦してもらえよう、公園に集客するためのコンテンツを求めており、双方のニーズは合致するものであったため、それぞれ企画主旨を確認しながら、実施に向けた連絡・調整が進められた。

(4) 研究会・事務局の関与

研究会・事務局では、日本都市センターが主に当日の調査に係る検討・調整を、戸田市役所が関係各所の連絡調整を行った。上述のとおり、イベントの具体的な企画・運営は「戸田マルシェ」に依頼し、イベントに係る経費は調査の一環という趣旨から、出店者から徴収する参加費を差し引いた額を研究会から委託費という形で支出している。「戸田マルシェ」への企画運営委託にあたり、コース水面への眺望を妨げない店舗の配置にすることなどを要望した他、レガッタとステージイベントとの開催時間の調整などを行った。

来場者(市民)に対するアンケート調査は、「マルシェ」における飲食・物販・ステージイベントに対する感想等だけでなく、戸田公園・漕艇場全体に対する印象や競技に対する関心をどのように持つのかを調査する事も目的としており、ボート試乗体験や艇庫巡りなどの水上・陸上での交流企画の実施にあたって村井氏に協力を求めることとなった。村井氏との連絡・打合せを重ねる中で、上述のようなボート競技者側の意図を把握し、艇庫の開放・スタンプラリーを行うこととなったほか、マルシェ会場にて子どもとの交流のための水かけ遊びにもボート部員がボランティアとして参加することとなった。

3 実証実験における調査

(1) イベント当日の概要

2018年7月15日の13～19時に開催された本イベントは、戸田市・研究会が主催する「水辺で遊ぼう♪くらふとカーニバル～in東京1964オリンピックボート会場戸田ボートコース」(以下、くらふとカーニバル)と、村井氏らを中心としたSprint Regatta実行委員会が主催する「ABeam Consulting Sprint Regatta」(以下、レガッタ)¹がそれぞれ同時開催という形式で実施された。

くらふとカーニバルに出店した店舗は、飲食、物販、ワークショップ等、合計35軒であり、これらは戸田マルシェによって募集された。また15時以降には簡易ステージ上にて音楽やダンスなどが公演された。

レガッタは、レースが13時から15時にかけて行われ、優勝チームへの表彰は15時30分から行われた。レースに参加した学生は216名、またレース運営のスタッフ、マルシェと連携した水かけイベント、スタンプラリーへの協力者として117名の学生および卒業生が参加した。

イベント全体としては約2,000人の来場者があった。その内訳は後述の通り戸田市民が多かったが、SNSを通じてマルシェのイベントに来場した市外在住者、大学ボート部のOB・OGの他、レガッタのスポンサー企業の関係者なども一定数あり、クラフトカーニバル、レガッタ相互に参加、鑑賞する人が多いように見受けられた。

¹ 総合コンサルティング企業であるアビームコンサルティング(ABeam Consulting)株式会社が、ボート部所属の大学生への認知度向上・リクルートなどの名目で村井氏らの企画に賛同し、冠スポンサーとなった。



図5-12 「くらふとカーニバル」チラシ



写真5-16 イベント開催状況

(2) 調査結果

本イベントにあたっては、来場者、出店者、ボート関係者の3つの属性の集団に対して、それぞれにヒアリング・アンケート調査を実施した。

①来場者アンケート

来場者に対する調査は、個人単位ではなくグループ単位で、時間帯ごとに一定数のグループを無作為に抽出し、対面式アンケートの形で調査を行い、総勢101組(308名)から回答が得られた。回答者の居住地は下図のとおりである。

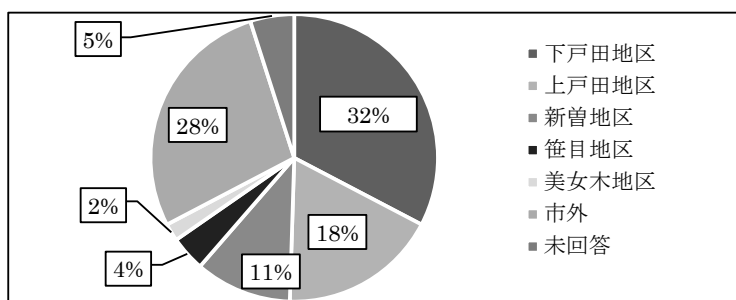


図5-13 回答者の居住地 (N=101)

戸田漕艇場近傍の下戸田・上戸田地区からの来場者が約半数を占めていることから、漕艇場への来場経験がない人は約20%に留まり、月に一度来場する、毎週来場する人を合わせると約30%になったほか、全体の約半数はボート競技観戦の経験があるなど、比較的ボート競技に馴染みのある層が多く来場した傾向がみられる。

イベントのコンテンツに対する評価では、飲食物販売(48組)、水かけ遊び(31組)、レガッタ観戦(20組)、ステージ(19組)といった内容への評価が高く、今後のイベントの開催については96%が「希望す

る」と回答し、またその内60%が戸田公園での開催を希望している。今回のイベントでは前半(13～15時)にレガッタ、後半(15時～18時)にステージを実施しており、滞在時間は長くて2時間程度であったことから、レガッタ、ステージ両方を体験した来場者は多くなく、それぞれが事前にイベントタイムテーブルを把握し、希望のコンテンツに合わせて来場したという実態も読み取れ、それぞれの時間帯でそれらを体験した人たちの満足度は高かったことがうかがえる。

②出店者アンケート

くらふとカーニバルにした全35店舗のうち、繁忙で対応できなかった店舗を除いて27軒の店舗出店者に対して対面式アンケートの形式で調査を行った。

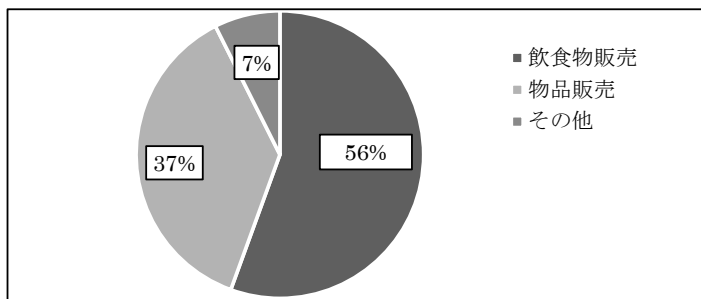


図5-14 回答者の出店形態 (N=27)

今後戸田公園でイベントが開催されるとした場合、また出店したいかという問いに対しては、すべての出店者が希望しており、戸田公園のイベントが求められている一方で、レガッタとの併催については評価が分かれた。

来場者が多く、また大学生を中心に若い人が多いことから活気があることについては好評価であったのに対し、あくまで別イベント

の併催であることから「イベントの主旨が分かりづらい」、「リンクが不足している」、「業務が手いっぱい学生と交流ができなかった」という声も聴かれた。

③ボート関係者アンケート・ヒアリング

競技およびイベントスタッフとして参加した大学ボート部員に対して、回答用紙を大学ごとにまとめて配布し、後日郵送にて回収した。レガッタの選手・ボランティアとして参加した総勢333名のうち、116名から回答を得た。

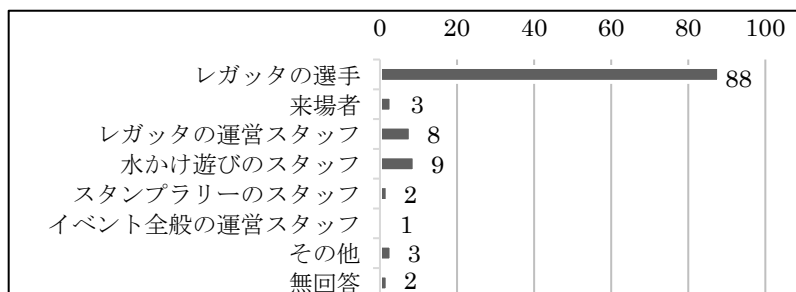


図5-15 回答者のイベントへの参加形態 (N=116)

回答者のうち96%が今後の戸田公園でのイベントの開催を希望し、また91%が何らかの形で「参加」を希望している。参加を希望しない理由としては本来の競技大会の日程との兼ね合いで負担になることなどが挙げられており、当日が猛暑であったことも合わせると適切な開催時期の検討が必要であろう。その他は「エンターテインメントとして」、「市民・家族連れとの交流」、「ボートを知ってほしい」というイベントの趣旨に沿った理由で開催・参加を希望しており、レガッタの継続的な開催が望まれている。

4 考察

イベント自体は盛況に終わり、来場者、出店者、ボート関係者のいずれも、高台公園にて同様のイベントをもう一度、更には継続的に開催したい旨の意向が強いことは、この場所の価値を顕在化させ、市民の認識を高めるという意味で一定の成果があったものと評価できる。高台公園は立地特性として市街地から遠く、何らかの目的が無ければ日常的に訪れることが無いため、イベントの開催は今後の利活用には必須と考えられる。

一方で、今回のイベントは「研究会」の実証実験という位置づけによって実施されたもので、全く同様のプロセスで実施することは難しいことも明らかである。また戸田市全体のまちづくり活動から見れば、高台公園のイベントによる活用は一部でしかなく、7月以降も戸田マルシェが企画・運営に関わるイベントは戸田市内各所で開催され、SNSを通じて情報発信は続けられているほか、漕艇場では毎週のように大小の競技大会は開催されているが、連携はされていない。今後の多様な主体の連携による活動を持続していくためには、戸田市全体のまちづくり・市民活動を見渡しコーディネートできる組織・プラットフォームが必要と考えられる。以下、そのための課題を第4章第1節で挙げられている「プラットフォームの3要素（ヒト・カネ・バシヨ）」と結びつけて、考察する。

（1）ヒト：連携の持続とコアメンバー以外への波及

今回のイベントの開催が実現した最大の要因は、市民側の主体として、今村氏を中心とした戸田マルシェメンバー、村井氏を中心としたボート関係者が、それぞれに熱意をもって活動していたことであろう。同じ場所、同じ時間に開催することが連携の契機となり、今回はそのマネジメントを市役所と研究会事務局が担った。今後は

市民側が多様な主体間の連携をマネジメントする役割を担うことが期待される一方で、マルシェもレガッタも、それぞれの関係者は本来の業務の合間を縫いながら、有志の活動として今回のイベントに手探りの中で関与しており、各主体の中心人物たちの属人的な要素に依存している。これまであまり関与してこなかった新たな主体へ波及させることが、今後の持続性を担保するために重要であると考えられる。

今村氏をはじめとしたマルシェの中心メンバーたちは、手作りクラフトなどの趣味から活動を始め、当初自らはクラフトイベントの出店者の立場であった。クラフト出店者同士のネットワークづくりの過程で、朝市やアートむすび市など運営・プロデュースを始め、今は戸田市内の多くのイベントに関わっている。

ボート関係者は、一部には社会人となっても実業団で競技を続ける者もいるものの、学生スポーツが主であるため常に部員の入替わりが生じている。ボート部としての「本業」である競技で切磋琢磨しながら、このイベントのような住民・地域との交流のための活動において大学の枠を超えて連携を行うこと、またその理念・趣旨を毎年人が入れ替わる中で引き継ぐことは容易なことではない。

しばらくは現在活発に活動している中心人物たちが「プラットフォーム・マネージャー」の役割を担いつつ、より広範な情報共有・課題解決に向けたプラットフォームを構築し、その中で新たな主体が生まれることが期待される。

(2) カネ：イベントの持続的な実施のためのシステム

イベントを持続的に実施していくために、行政からの補助金や委託費などに依存しない自律的な財政システムの構築が必要である。

レガッタ開催のための費用では、コース水面を利用するための使用料が高額であるが、イベント趣旨に賛同するスポンサーを得たこ

とで、今回は賄うことができた。村井氏によれば、スポンサー企業は今後も同様のイベントを支援したいとの意向を示しているとのことであり、レガッタ継続の財政的な課題は小さいと考えられる。

一方で、くらふとカーニバルの開催に係る費用の一部は研究会から委託費として支出されたが、次年度以降の補助の担保はない。レガッタと同様にスポンサーを募るなど主催団体による自立的な財政基盤の確立が求められるが、レガッタとマルシェを同時開催すること自体についても、その内容の検討は必要であると思われる。出店者へのヒアリング調査の結果、当日は猛暑でもあり、飲食関係の出店者からは売り上げ、雰囲気ともに相乗効果があり満足度が高い意見が寄せられたが、主に手作り工芸品を中心とした出店者からは、レガッタとマルシェの一体感が小さく、工芸品の売り上げも芳しくなかったとの意見が出されている。

今回は当初別個のイベントとして企画が始まり、両者が顔を合わせて打合せ・検討をする機会は少なかったため、クラフト・ワークショップを中心としたいわば「文化系」の活動と、「体育会系」のボート部の活動・レガッタの観戦という2つの異なるコンセプトをどのように交流させるかについて十分に議論を行うことは出来なかった。イベントを一体的に運営する上で、各主体が「やりたい」と考えるコンセプトについてどのように調整を図っていくのかが、今後継続的にイベントを実施していく上で課題であるといえる。そのためにも前項であげた「プラットフォーム」におけるコミュニケーションとそのマネジメントを図る主体の存在が重要になるだろう。

(3) バショ：より魅力的な水辺の利用への展開

実証実験におけるアンケートでは、来場者・出店者・ボート関係者それぞれに「戸田公園が日常的に使われるために必要なもの」を自由回答で質問している。その回答は、来場者とボート関係者それ

ぞれが共通して第1位に飲食施設、第2位にカフェが多く挙げられた。仮に飲食施設・カフェを置くとした場合、常設的に設置することは立地環境から商業的に難しいことが予測され、今回のイベントのように移動販売車等による仮設的な機能配置を足掛かりとして、徐々に常設的なものに移行していくことが現実的とみられる。また「日常的」という設問主旨にやや反するが、第3位には「イベント」が挙げられており、このことから高台公園はイベントの場としてのポテンシャルが高く、店舗の運営を持続的なものにするためにも、規模の大小を問わず定期的にイベントを実施し、住民に足を運んでもらうことが重要であることが示唆される。

高台公園にカフェを設置する案については第5章第2節にて具体的な提案がなされているため、ここでは戸田公園・漕艇場全体に視野を広げた活用を考える。村井氏らボート関係者からは水質の浄化、特に藻の繁茂が現実的な課題として挙げられている。コースの水質悪化はかねてからの課題であり、戸田市ではイケチョウガイをつかった浄化に取り組んでおり改善傾向がみられるが、現在は藻の繁茂によって競技に支障が出ることもあり、競技者による自助的な対策は限界に近づいている。

根本的な改善のためには、市民を巻き込む形で水質浄化、藻対策を行なうことが必要であり、市民の関心をコース水面に向けるきっかけとして、時間・場所を限定して市民の活動にコース水面を活用することを検討しても良いのではないだろうか。村井氏は考えている。具体的には、近年各地で行われているSUP(Stand Up Paddleboard)などの水上レクリエーションを通じて、市民がボート競技以外の形で水面に触れ合う機会を持つことや、水上に台船を設置してコンサートを行うなど、水に触れ合う、コース水面に視線を向ける方策が考えられる。

すべてのボート関係者が共通の思いを持っているとも限らない

が、イベント後の村井氏に対するヒアリングでは個人の見解として、戸田漕艇場はボート競技専用のコースとして整備され、「ボートの聖地」と言われるが、市民によるボート以外の水面利用を全く排除するものではなく、市民に開放することも検討すべきではないかとも述べられた。

今回のようなイベントを継続的に実施し、市民とボート関係者との交流やイベント運営の仕組みなどが確立されていくことで、双方の理解が深まり、より柔軟な空間の利用が可能になることで、戸田公園地区全体の魅力の向上に結び付くことが期待される。